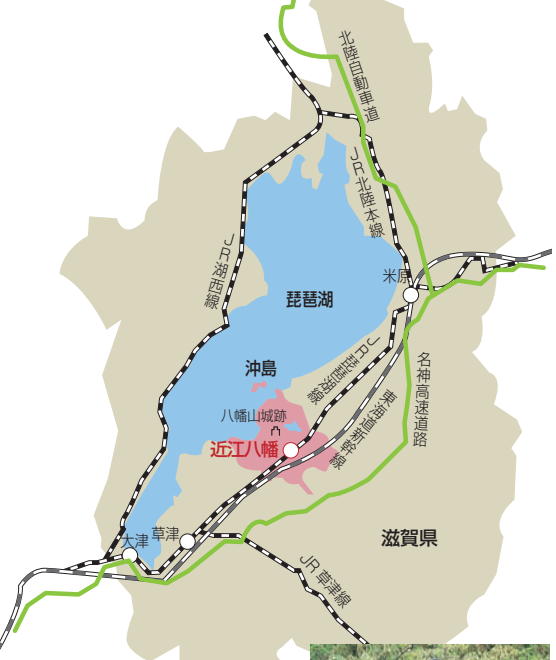
滋賀県近江八幡市

近江商人の発祥の地、滋賀県近江八幡市に根づいた自立自助のまちづくりと「三方よし」の精神

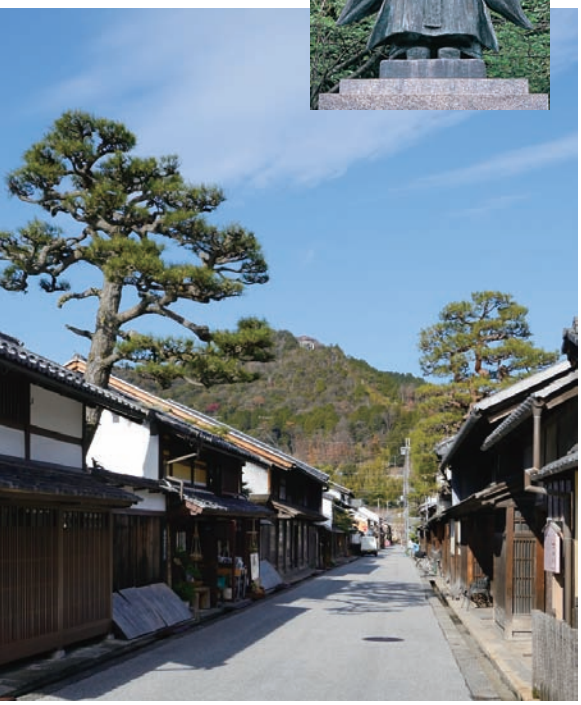
織田信長と豊臣秀次が基盤を築いた近江八幡市には、城下町の名残をとどめる美しい町並みと、琵琶湖周辺の水郷地域をはじめ美しい自然が残る。「おかげさんで」という言葉が日常で交わされる、近江八幡の人々の胸には今なお、古くから培われた近江商人の思いが継がれていた。

取材・文 山内史子　写真 野瀬勝一

桜の花が彩る、春の「八幡堀」



右／かつて城があった八幡山の山麓「八幡公園」には、豊臣秀次の像が建つ。



八幡堀周辺には江戸時代末期建築の豪商の屋敷をはじめ古い町並みが続いている。

今も確かに継がれる近江商人の精神

近江商人発祥の地である近江八幡市は、琵琶湖の南東、滋賀県中央部に位置する。この地が歴史の表舞台に登場するのは、天下統一を目指した織田信長が安土城を築城したことによる。その後、豊臣秀吉の甥の秀次が八幡山城を築城し、信長時代以来の楽市楽座のもとで、城下町や商いは栄えた。

八幡山城築城の一〇年後、豊臣家の跡継ぎ争いを巡って秀次が二八歳の若さで自決の運命をたどると、秀次が築いた壮麗な城も廃されたが、交通の要所、商いの拠点としての役割は残った。

その後、近江八幡は実質的に商人たちが中心となる自治都市として江戸時代を歩んでいった。殿様には頼れない、自分たちだけで生きねばならない。自立、自助の精神がいつしか育まれ、それがやがて全国に散る近江商人の礎になっていく。

彼らの心に深く刻まれていた理念は、「三方よし」。売り手よし、買い手よし、世間よし。自分たちだけがもうけるのではなく、お客さまが喜び、さらには社会に貢献できる商いを、というものだ。

質実もまた、近江商人の心得のひとつ。近江八幡市には昔ながらの瓦屋根が続く町並みが残り、かつての豪商の屋敷の一部は資料館として見学できる。いずれも構えは大きいが、表立って華美な印象は受けない。とはいえ、たとえば引き戸に大きな一枚板が使われているなど、よく見れば贅が尽くされているのが興味深い。

自立、自助、三方よし、質実。その精神が今なお継がれていると、取材を重ねながら追々気づくことになるのだが、その緒を与えてくれたのは、近江八幡市長の冨士谷英正氏だった。

早朝からエネルギッシュに市政に取り組む冨士谷英正市長。そのスタイルは就任以来、今も変わらず続いている。

一〇年に市長に就任した冨士谷氏は、思いきった行財政改革を断行している。まずは人件費を削減し、総事業決算対比で二三%から一七%へと縮小させた。単に職員を解雇したわけではない。保育園や給食センターといった、市が関わっていた施設の一部を民営化した結果だ。

さらには、幼稚園や保育園、学校、コミュニティセンターといった教育、文化関連の建物を集結。コミュニティセンターは学校と渡り廊下でつなげられ、災害時には避難施設になる。

「まとめた方が人が集まって賑わいが高まる。そして、絶対に安

くあがる。僕にも近江商人の血が流れているんでしょう。株式会社近江八幡、自治体経営も本質は企業経営と同じだと言ってるんです。がめつくもうけて、スマートに使う（笑）」

冨士谷市長は冗談めかして笑ってみせたが、コストカットにより生じた「もうけ」は、福祉・教育分野などに注がれている。

「大切なのはやはり、住みたいと思う魅力のあるまちをつくること。当市は高齢者のためのデイサービス、特別養護施設、老健施設などはかなり充実しています。ただ、財政にも配慮して、やりすぎにならないように歯止めをかけつつですが。一方、保育施設のキャパシティに余力をもたせるよう心掛けています」

冨士谷氏が市長になってから転入者が増え、人口は現在約八万二五〇〇人にまで増加。出生数も増え、嬉（うれ）しい悲鳴をあげている。

もっとも印象深かったのは、一般廃棄物処理施設建設に関するエピソードだ。通常ならば行政側が補助金を出し、候補地の住民に徹底して頭を下げ、なんとか話がまとまるものではないか。しかし、市長がとった策は逆だった。

「一般廃棄物処理施設を受け入れてもいいという自治会は、手をあげてください。そう、皆さんに投げかけたんです」

受け入れた場合、一〇年で一億円が自治会のまちづくりのために支給される。ほかにも利点はある。廃棄物は単なるごみではなく、焼却の余熱を使って発電や温水プールもできる資源エネルギーだ。そんな施設のメリットを、市は積極的に住民に宣伝してきた。果たして、三つの自治会が立候補したそうだ。住民の意見のとりまとめも、自治会が行った。

「一般廃棄物処理施設は、人間の経済活動になくてはならない存在。火葬場やし尿処理施設も同じです。それなのに、お金をもらったから引き受けるという発想は人間を悪くします。損か得かの世界なんて、味気ないでしょう」

効率に徹して改革を進めているように見えつつ、その裏には深い情が秘められていたと知り、思わず胸が熱くなる。

「行政がなんとかせい、は昔の話。皆さんはどうしたいんですか？　まずはそれを教えてください、と僕らは言うんです。行政も行動しましょう。そのかわり、皆さんも責任をもってくださいと」

（冨士谷市長）

「いいもの」を守ればおのずと商いになるとの思い

シビアにも聞こえるが、近江八幡市では住民たちが自分で考え、自ら行動に移した過去の実績があった。豊臣秀次の時代につくられた「八幡堀（はちまんぼり）（全長約五キロ）」の再生の取り組みだ。その名のとおり八幡山城の防御のために開削された八幡堀には、琵琶湖の水が直接引き込まれ、運河としての役割もあった。

琵琶湖南東岸を通る船はすべて八幡浦を経由しなくてはならないという秀次のお達し以来、近江八幡は流通の拠点となり、同時に多くの情報と物資がもたらされた。しかし、時代の変化や水位の低下とともに琵琶湖の水運は廃（すた）れ、堀の役割は失われる。

加えて明治期、鉄道が敷かれる際に、煙を吐く列車は街中を走って欲しくないとの意見が多数を占めたことが、後に大きく影響する。八幡堀から徒歩で三〇分近くかかる場所に建った駅を中心に新

しばしば時代劇の舞台となる「八幡堀」では、昔風の小舟に乗り、ゆるり景色を楽しむ観光客の姿も見られる。

八幡堀沿いは、観光客のみならず地元の人にとっても癒やしを与えてくれる散歩道。町家を利用したカフェなど、若い世代の注目も集めている。

しい町が広がり、城下町だった古い町並みや八幡堀の存在を知らないままに暮らす住民も増えていたのだ。

無用となった上、六〇年代にはヘドロの悪臭があたりに漂うほど水が汚れ、その対策として埋め立てに行政が動き出したのは自然の成り行きだろう。しかしながら、同時に「堀を埋めた瞬間から後悔がはじまる」という声が、地元の青年会議所からあがった。

「まちが今あるのは八幡堀があったからこそ。八幡堀はみんなのものだ」という意識が地元の若者の間で甦った。それなら、未来の子どもに歴史ある景色を残すために、自分たちで汗をかこうと、再生のための活動が始まった。

とはいえ、既に堀の埋め立てに向けて動き出した後のこと、すぐには行政や市民に受け入れられなかった。それでも青年会議所のメンバーが毎週八幡堀へ入って清掃を続けたところ、次第に市民の目が変化し、清掃に参加する人やその人たちに食べ物等を差し入れる人が増えていった。近江八幡の誇りを自らの手で取り戻す事業として、共感の輪が広がり始めたのだ。その結果、滋賀県は進みかけていた改修工事を中止し、国にその予算を返上することになった。

現在の八幡堀は、以前の状況が信じられないほどの明媚さである。風情あるその姿ゆえに、テレビや映画の時代劇の撮影場所として頻繁に使われ、大勢の観光客が日々訪れている。

すだれの材料ともなる、葦が生い茂る水郷地域。この地域の葦は上質で、かつて織田信長に献上されたことも。

近江八幡観光物産協会会長を務める森嶋篤雄氏。協会の事務局が置かれている登録有形文化財の「白雲館」を背にして。

実は近江八幡市は、〇四年に施行された国の景観法に基づき、最初に景観計画を策定した自治体だ。守るべき美しい景色は、大きく二つに分かれる。八幡堀を要として旧家が続く街中と、水郷や豊かな田園風景が広がる郊外のエリアだ。

水郷も、埋め立てて整備する話が持ち上がっていたが、こちらも景観は保たれ、今や葦が茂るなかを小舟で行く水郷めぐりも近江八幡観光の目玉のひとつに。

明治十二年（一八七九）創業以来、近江牛の販売や飲食店を手がける「毛利志満」を営み、現在は近江八幡観光物産協会の会長を務める森嶋篤雄氏が語る。

「このまちへの観光入込客数は、

近江八幡で育った以上は、次世代の子どもが住みたいと思うまちにしたいという「たねや」社長、山本昌仁氏。「まっせ」の代表として、新しいまちづくりにも取り組んでいる。

数年前から年間二五〇万人から三〇〇万人に飛躍的に増加しましたが、単純には喜んではいられません。観光客の満足度を考えたら、むやみに人数を増やそうとは思いません。まちの受け入れ態勢を超えて大勢のお客さんが来たらどうなるか。行ったけど大変だった、車は混んでいるし、停めるところはないし、見るところも見ないで疲れて帰ってきたわ、となりますね。だから、近江八幡の魅力を十分に感じてもらい、また来たいな、と思ってもらうためには、腹八分目が肝心なんです」

大がかりなイベントの開催、巷で人気のゆるキャラ、B級グルメを創り出す打ち上げ花火のようなアイデアは、観光関連の話し合いの場があっても自然と流される。景色と調和しない派手な看板も近江八幡では見かけない。

「仕掛けで宣伝するのではなく、あるものを少し磨かせていただいて、皆さまの目につくようにしようと。いいものをつくっていればやがて信用が生まれるはず。消費するような観光対策ではなく、今だけ良ければいいのでもなく、先々まで市民にも観光客にも愛されるまちでありたいんです」

人任せにしない まちづくりを目指して

そんな近江八幡流を具現化したのが、創業一八七二年の和菓子舗「たねや」だ。駅から離れた旧市街に建つ日牟禮八幡宮境内に、飲食、カフェも兼ねた「近江八幡日牟禮ヴィレッジ」をオープンしたのは、〇三年のこと。かつてこの地に暮らした、建築家ウィリアム・メレル・ヴォーリズ（注）が設計した邸宅も利用した試みだ。

たねや四代目を継いだ山本昌仁氏が語ってくれたその背景は、なるほどと思わせるものだった。

「駅のような近代的なものは、いつかなくなるかもしれない。でも、お宮さんは、絶対に揺るぎないという考えでした」

日牟禮八幡宮は正月ともなれば賑わうが、その頃はふだん、界隈の人通りが多かったわけではなく、「なんでこんなところに」との声も聞こえたそうだ。実際、しばらくは苦労が続いたが、「たねや」のおいしさと知名度があがるにつれ客足は伸び、洋菓子部門（クラブハリエ）のバームクーヘンの人気も相まって、現在では県内外から年間六〇万人もの客がこの店を訪れる。

山本氏は、まちづくりにも積極的に関わっており、一三年には「（株）まっせ」を立ち上げた。一〇年に旧近江八幡市と旧安土町とが合併したが、「まっせ」では双方を結ぶ自転車ルートを設け、観光客の散策範囲を広げようというプラン実現に動いている。企業形態にしたことで、物事がスムーズに決まるようになったそうだ。

「補助金だけに頼っていたら、がんじがらめになってしまう。しかも、なにかあれば行政の責任、政治の責任になる。でも、選んでいるのはわれわれなのだから、自分のこととして考えていかなければならない。人任せにしないまちづくり。これから絶対に重要になってくると思います」

「まっせ」の取り組みのひとつ

古くから近江商人の信仰を集めてきた「日牟禮八幡宮」。古木が生い茂る境内には、どっしりとした拝殿や本殿が静かにたたずんでいる。

（注）米国生まれ。明治後期に来日し、近江八幡を拠点に活動。数多くの西洋建築を設計したほか、近江兄弟社、ヴォーリズ記念病院などを創立した。

に、古い民家の再利用を目指す「町家バンク」がある。住人がいない、実質空き家状態の古い町家は約五〇軒。それを登録してもらい、建物の保存のためにも、他県をふくめて広く借りる人を募るというシステムだ。

事務局を預かる田口真太郎氏によれば、「近隣景観形成協定地区」に指定されると自治体や国から多少なりとも補助が受けられるものの、瓦ひとつにしても受注生産となるだけに、その維持は大変なのだという。加えて不動産は権利問題が複雑なケースもあり、バンクを運営していく上での支障や課題は少なくない。町家の住民が、次第に高齢化してきているのも否めない。

「町家バンク」の要を担う田口真太郎氏。町家暮らしに憧れる人は全国でも少なくないが、新しい住人が近江八幡の伝統や文化にほれ込むことこそが大切だと話す。

とはいえ、これまで六軒の契約が成立し、うち四軒はカフェやベーカリーといった洒落（しゃれ）た店舗に。若い世代がまちに新風を吹き込んだ。さらには町家を巡るイベントやワークショップの影響もともない、地元の人たちのなかで旧市街や町家の認知が高まったと、田口氏は手応えを感じている。

地域の絆を再び取り戻すために

そんな田口氏は、実は茨城県の新興住宅地で生まれ育った。滋賀県の大学で都市計画を学んだことから近江八幡と縁が生まれ、卒業後に移り住んだ。町家暮らしも体験。メンテナンスの大変さを実感したと同時に、一度心が通じ合えば、家や庭の手入れに近所の人々が尽力してくれると、身をもって知ったという。

「清掃活動やお祭りまで、地元の人にとっては参加するのが当たり前なんですよね。でも僕らの世代では、言われなければわからない人もいる。その橋渡しにならなければなりません。ことに町家の保存とお祭りというのは、密接につながるものだと感じています」

「まっせ」の取締役のひとりであり、近江八幡商工会議所会頭の秋村田津夫（たつお）氏もまた、祭りの重要性を訴える。

近江八幡市には江戸時代から続く「左義長（さぎちょう）まつり」、応神天皇の日牟禮八幡宮への参拝に由来するともいわれる「八幡まつり」という、いずれも国の無形民俗文化財に選択された火祭りが継がれてきたが、若い世代の流出により、その文化が廃れつつある地域も見られる。

「祭りがあると集落がかたまる。気持ちをひとつにしてくれるんです。そのためにも保存会を立ち上げたいんです」

三月の「左義長まつり」（左）、四月の「八幡まつり」（上）と、春は近江八幡が賑わう季節。まつりそのものだけではなく、松明や山車を作る作業を介して住民の心がつながる。

実は旧近江八幡市と旧安土町、双方の地域で共通する祭りのかけ声が、「まわせ」という意味の「まっせ」なのだと、秋村さんは話す。「左義長まつりのルーツは織田信長時代の安土にあります。その山車（だし）を引き回すときのかけ声が、『まっせ』なんです」

祭りは集落のみならず、二つの地域の心をつなげる大切なキーワードになりそうだ。

また、商工会議所では伝統野菜「北之庄菜（きたのしょうな）」の再生プロジェクトにも取り組んでいる。江戸時代末期から昭和三十年代にかけて、農家が漬物用に栽培していた野菜

「若手が活動しやすい環境を整えるのが自分の役目」と語る近江八幡商工会議所の秋村田津夫会頭。生物のもつ優れた機能を工学に応用するバイオミメティクスを近江八幡で育てる活動にも取り組んでいる。

は、食生活の変化にともない、いったん姿を消したが、偶然に種が発見されて復活。給食での利用や、加工品として商品化され、その存在価値が見直されつつある。

また「たねや」では、今秋、豊かな自然が残る郊外に「ラ・コリーナ近江八幡」という新しい施設をオープンさせる予定だ。菓子の販売のみならず、山野草の農園や菜園なども設けられ、子どもたちの農業体験も行われる計画。

近江八幡の個性や魅力を未来に伝えるための、いわば種まきが少しずつ行われている。そんなことを思いながら、ボランティアガイドを務めて五年目になるという平松清廣氏とともに、旧市街をあらためてゆっくりと歩いてみる。

町家には表札がかかり、軒先には手入れがなされた植木鉢が並ぶ。テーマパーク的に創られたものではなく、住民たちがここで生活しつつ、昔ながらの景色を今も紡いでいるのだ。

ユーモアを交えて語る平松氏の案内は巧みながら、もともとはふつうの会社員だったという。

「観光ボランティアガイド協会主催の『近江八幡ふるさと観光塾』がきっかけです。自分が住んでいる近くに、こんなに素晴らしい景色が残っていると知って感動した。自分でもそれを広められたらいいなと」

絶滅したと思われていた北之庄菜は、10年ほど前に地元農家のマッチ箱から種が発見され、再び栽培が始まった。

現在、五四名のボランティアガイドが、観光客の案内役を務めるが、その多くは近江八幡に魅せられた移住者なのだそうだ。

移住者の動向で注目したいのは、駅近くの利便性の高い住宅地ではなく、自然が残る郊外が選ばれることだろう。京都まで三〇分、大阪は一時間というロケーションながら美しい景色が広がり、場所によっては家の窓から琵琶湖が望める。

「景観」、近江八幡観光物産協会の森嶋氏の言葉を借りれば「いいもの」を守る選択をした近江八幡は、図らずも人を呼び寄せている。

森嶋氏はまた、こんな話もしてくれた。

「このまちの商家には、共通する姿勢がありましてね、ひとつは商売をしたら店をつぶしてはならぬというもの。もうひとつが、皆さんのおかげで商売させてもらっているということ」

道で知人と会えば、「こんにちは、どうですか。気張ってはりますか」と挨拶する。それに対し、「おかげさんで」と返すのが近江八幡の習わしだ。

「この地の考え方と文化が守られていれば、永久に安泰だと思います。社会にどんな変化が起きても耐えていける」

秀次が城を築いた八幡山を仰ぎ見ながら、冨士谷市長の言葉を思い出した。

商いの才覚や背後にある歴史は、一朝一夕で積み上げられるものではない。だからこそ「三方よし」の気配りをはじめ、この地に根づいた精神が町並みに宿り、輝きを放つ。今だからこそ、それは大切なことのように思えるのだ。

琵琶湖東南岸にある最大の内湖「西の湖」もまた、かつての水郷の景色を残す近江八幡の宝のひとつ。2008年には琵琶湖の「ラムサール条約湿地登録エリア」に追加された。